



## 念願のホームページ、ついに完成!か?

### 登場人物

薬学部の大学生:舞  大学の先輩:大輔  薬局の主人:修一郎  料理店の親父:通称“仙人” 

### 【前回までのあらすじ】

ホームページ作りの極意を伝授されて、さっそくホームページ作りに取りかかったのだが・・・

### 修一郎、思い悩む

『梅一輪、いちりんほどの暖かさ (嵐雪)』

修一郎は、そんな句を思い浮かべながら、縁側から鉢植えの紅梅を眺めていた。こんな小さな木でも、春が来れば、自然と蕾をつけ花を咲かせる。居間のパソコンにも、そんな気の利いた機能があつたらなあ、と妄想を膨らませていると元気のいい声が聞こえた。

「おはようございます」

「おお、舞ちゃんか、待っていたよ」

「梅の花なんか見ちゃって、どういう心境ですか？」

「いや、梅の木って、偉いなあ、と思ってね」

「なんか考えすぎて疲れているんじゃないですか」

「それでも無いんだが・・・ところで、ホームページ作りの極意の方はどうなったんだい」

舞は、仙人の極意が書かれた紙を取りだして説明を始めた。

- 一．ホームページの目的を明確にする
- 二．役に立つ情報を掲載する
- 三．更新頻度だけに囚われない
- 四．誰に見てもらおうのかを考える
- 五．インパクトのある名前を考える
- 六．5W1Hを考慮する
- 七．自分の意見を入れる
- 八．ホームページの存在を広く知らせる

「なるほど、このように順を追って考えていけば良いんだね」

修一郎は、さっそくワープロソフトを開いて座ってみたが、また考えこんでしまった。

「ホームページの目的かあ。う～ん。すぐにはアイデアは出ないもんだね」

「一度、パソコンを消してみたらどうでしょうか？」

「それって、どう言うこと？」

「新しい企画などを考えるときには、パソコンから離れた方が良いアイデアがでる時があるんです」

これは、仙人に良く言われていることだった。

「でも、最近は、パソコンも賢くなって、ボタンを押していだけでプレゼン資料が出来るようなソフトもあるようだよ」

「そんな風に作っても、本当にクリエイティブなものは出来ませんよ。パソコンは、単なる道具で、アイデアを出すのは人間なんです。モンブランの万年筆を買っただけでは小説が書けないのと同じことです」

「そうなんだよなあ。車だって自転車だって、人間が運転しなければ走れないものなあ。パソコンさえ使えば何でもできそうに感じるのは幻想かも知れないね」

舞は、何も書かれていない白い紙を取りだして修一郎の前に置いた。

「アイデアを出すのは、これが一番なんです」  
「ん？ただの紙じゃないか」

## ホームページのアイデアを練る

「真ん中に、丸を一つ描いてくれませんか」  
「こんなので良いかな」

「その中に、『ホームページを作ろう』と書いて下さい。そこから枝のように線を出して、思いつくものをドンドン書いていってください」  
「庭の梅の木みたいになってきたよ」

「アイデアは、できるだけ短いセンテンスで書くのがコツなんです。派生する新しい考えは、分岐させて、別の枝に書いていくんです」  
「なんか、アイデアが湧いてくるような気がするね」

「これは、マインドマップというアイデアを出すための手法なんです」  
「へえ！知らなかったなあ」

「人がアイデアを出す過程は、そんなに理

路整然としたものじゃないんです。一つの考えからイメージや概念が縦横無尽に出てくるものなんです。それをワープロソフトなどで直線的に書き出そうとするから息詰まってしまうんです」

「これを見ていると、自分がどんな風にものを考えているかが良く分るね。いったい、誰が考えたの？」

「英国の脳の研究者であるトニー・ブザンと言う人です。これを使って創作ノートを作っている小説家も多いんですよ」

「闇雲に、パソコンのワープロに向かっても、アイデアが浮かばなかった理由が分ったよ」

「マインドマップは、本屋さんに行くと解説書がたくさん出ていますよ」

「もっと詳しく勉強してみたいなあ」

修一郎は一本目の枝に、『ホームページの目的』と書いて、それから何本も枝を出した。

「お客さんを増やすのが第一の目的。次は、薬や健康に関する正しい知識を伝えること。あとは、私の言いたいことを伝えるといったところかな」

「次は、もう少し具体的に中身を考えていきましょう」

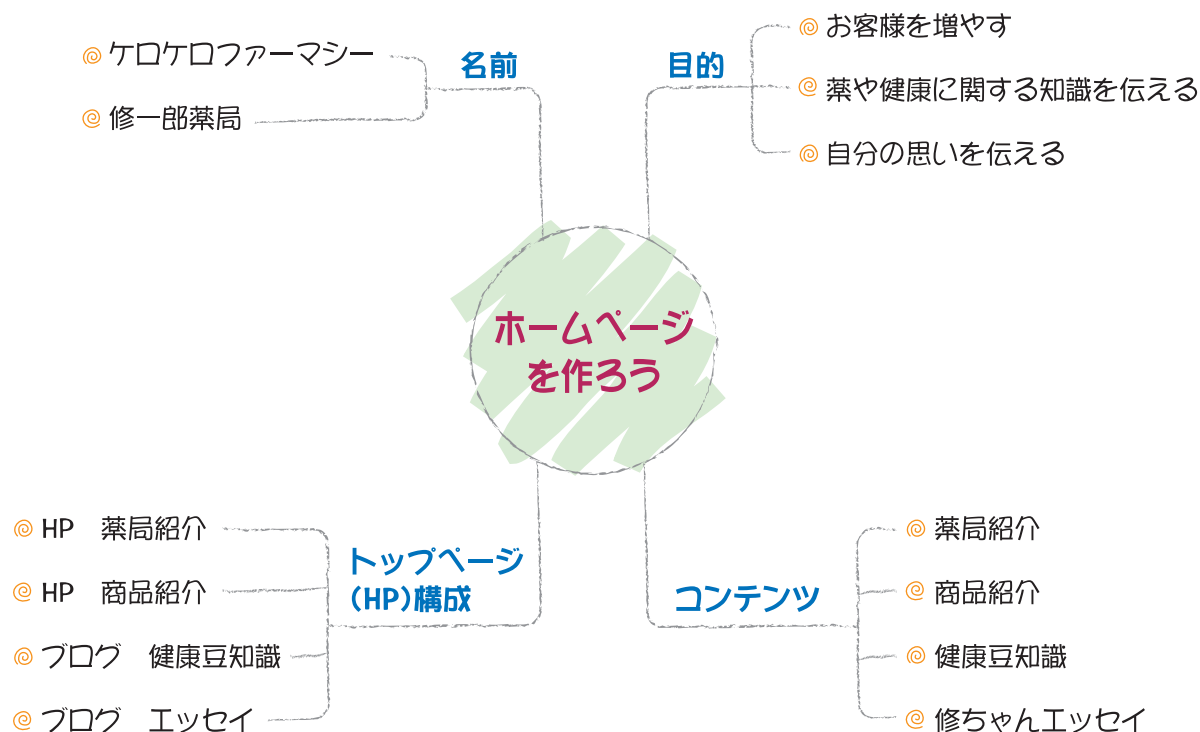
「掲載したいのは、薬局の紹介、商品の紹介、お薬や健康に関する情報提供として、健康豆知識、それに 修ちゃんエッセイ、というのはどうだろうか」

「だいぶ調子が出来てきましたね。ところで、ホームページの名前はどうしましょうか」

「うちの薬局名の『修一郎薬局』はどうだろうか」

「う～ん。少し堅いですね。ケロケロファーマシーというのは、どうでしょうか？」

「店頭のカエルのマスコットからイメージしたんだね。その下に、修一郎薬局も入れてよ」



「了解。それでは、ケロケロファーマシー『修一郎薬局』にしましょう」

「名前は良く聞くけれど、ブログってホームページとは別物なの？」

「ブログは日記を書くもの、みたいに思われていますが、ブログも立派なホームページですよ」

## 次はホームページの構成だ！

「次は、ホームページの構成を決めましょう」

「家の間取りを決めるようなものだね」

「まず、トップページが必要です。ぱっと見たときに、どんな内容のホームページか理解させる必要があるんです」

「トップページがつまらないと、中まで見る気にならないからね」

「本の表紙や目次の役割をするものと考えると分かりやすいですね」

「そこから、それぞれの本文が書かれたページに行けるようにするんだね」

「ここで、一つ提案があるのですが、ブログを取り入れてみたらどうでしょうか」

「なんでブログって言うんだい？」

「ブログはウェブログの略で、書きこんだ文書をログ（記録）として残してくれる機能があるんです」

「ブログといわゆるホームページの違うところは、ホームページだと新しい記事のページを作るときに、古い記事を保存して、リンクを作る作業が必要になるんです」

「それは面倒くさそうだね」

「ブログは、この作業を自動でやってくれるんです。しかも、過去の記事はデータベースに格納されるので、検索も簡単なんです。書いた文章をカテゴリ別に分けたい時とか、指定すれば自動で分類してくれるんです」

「これだけでホームページができるんじゃないかな」

いの」

「でも、ブログは、機能やデザインに、あまり自由度がないんです」

「そう言えば、ブログって見た目はみんな良く似ているね」

「『この部分のリンクの色だけを変えたい』とか『こういうレイアウトにしたい』など、細かいデザインにこだわりたければ、やはり作り込めるホームページでしょう」

「なるほど、それぞれ特徴があるんだね」

「そこで、良い所取りしてホームページとブログを組み合わせたらどうかと思うんです。トップページなどはデザインにこだわるホームページで作って、連載記事の『健康豆知識』や『修ちゃんエッセイ』はブログにするというのはどうでしょうか」

「ホームページの部分は、難しそうなので舞ちゃんが作ってくれるかな」

「良いですよ。おじさんが記事やエッセイをブログに書いていってくれば、自然にコンテンツが充実していきますよ」

「それは、グッドアイデアだね」

このようにして、ようやく修一郎の薬局でもホームページを持てるようになった。インターネットを取り巻く環境は、ここ10年で大きく変わった。“Web2.0”と呼ばれる新しい風が吹いて、お金や時間をかけなくても、誰でも情報を発信できるようになった。しかし、技術がどんなに進んでも、アイデアと中身が最も重要で、それを考えることは難しいことだ、ということ修一郎は身にしみて感じた。

次回に続く・・・

